



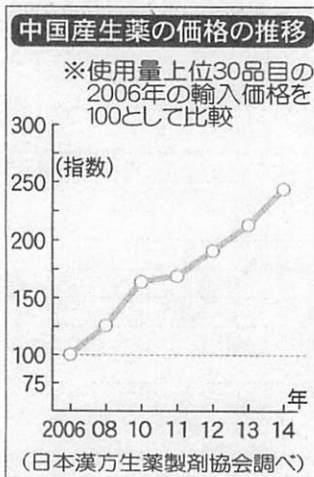
生薬高騰 薬局ピンチ

さまざまな病気の治療に使われる漢方薬のうち、煎じて飲む「生薬」の値段が高騰し、卸売業者から薬局への納入価格が、厚生労働省の定める薬価(公定価格)を上回る「逆さや」現象が起きている。薬局では調剤料などで赤字を補

っているが、関係者は「このままでは生薬を扱う薬局が減るだけでなく、保険を使った処方も難しくなる」と指摘、国に対し薬価の引き上げを求めている。

(片岡達美)

中国の人的費増、需要拡大



漢方を主に取り扱う調剤薬局。原価高騰が患者へのしわ寄せにならないか懸念される。西宮市甲子園口2-1-1「たんぽぽ薬局」

時価で輸入、定価処方で赤字

漢方の生薬は現在、約8割を中国から輸入。価格は薬価を前提に販売すると、近年急激に上がり、10年ほどで約2・5倍に跳ね上がった。生薬総合卸「栃本天

海堂」(大阪市北区)では1800品目のうち7・8割が赤字。約200種の生薬を扱う西宮市の「たんぽぽ

費高騰▽富裕層を中心とした中国国内や欧米での需要拡大▽気候変動の影響による耕作面積の減少などが考えられるという。

中国の生薬生産業者の人的費高騰▽富裕層を中心とした中国国内や欧米での需要拡大▽気候変動の影響による耕作面積の減少などが考えられるという。

生薬 天然の薬用植物を加工した漢方薬。病状や体質に合わせて数種類を組み合わせ、煮出して飲むことが多い。顆粒(かりゅう)状の漢方製剤の原料としても使

われる。日本漢方生薬製剤協会によると、多くの漢方薬に使われるニンジン、カンゾウの高騰が著しく、カンゾウの輸入価格はこの8年で約5・8倍になった。

同社の佐藤公紀部長(52)は「昨年4月の薬価改正では生薬15品目が引き上げられた。次の改定に向け、さらに薬価が上がるよう関係機関に働きかけている」と話す。ただ、医療費抑制の流れに加え、2013年の医薬品総生産額に占める生薬の割合は0・05%と市場規模が小さく、同

協会の関係者は「値上げは簡単ではない」と打ち明ける。近年は国内の一部地域で栽培を始め、さらに中国以外の国から輸入するなどの動きもあるが、いずれも量は少なく、コストも中国産より大幅に高い。

兵庫の服用者 「値上げ心配」

「年金生活なので、生薬が値上がりすると治療を続けられなくなる」。昨年6月ごろから生薬を服用しているという芦屋市の女性(69)は不安な表情を浮かべた。

胃がんの手術後、背中から腰にかけて痛みがひどく、腰掛けていられるのはせいぜい1、2分。痛み止めも効かなかったという。困り果てて西宮市の西本クリニックで受診。血の巡りをよくし、免疫力を高める生薬を処方された。がんの再発・転移の抑制や、化学・放射線療法の副作用軽減などの効果も報告されている。

煮出した生薬を1日2回、空腹時に飲んだところ「3、4日で痛みやだるさが軽減し、驚いた」と女性。服用を続けると症状はさらに改善され、今では生薬を手放せないという。

「薬代は月3千～4千円でこれが限界。保険がきかなくなったり、薬価が上がったりしないか心配」と話した。